

最近の少年犯罪に関する教育臨床的研究

生島 博之 (愛知教育大学教育実践総合センター)
(2005年10月17日受理)

Educational Clinical Study on the Recent Juvenile Delinquencies

Hiroyuki IKUSHIMA (Center for Research, Training and Guidance in Educational Practice,
Aichi University of Education)

要約 本論文は、最近5年間あまりにおける少年犯罪を教育臨床心理学の観点から研究したものである。神戸小学生殺傷事件から始まり、黒磯女教師殺害事件、豊川主婦刺殺事件、西鉄高速バス乗っ取り事件、岡山県金属バット殴打・母親殺人事件、等を取り上げ、これらの少年が、犯罪に至るまでにどのような家庭教育や学校教育を受けてきたのか、規範意識が育たなかった、あるいは、規範意識が弱過ぎたのは何故なのか等について考察した。その結果、学校が少年犯罪の『舞台』とならないようにするためには、『怨み』を聞く回路づくりができる教師の実践的指導力が不可欠であり、研修やスーパービジョン制度やスクールカウンセラー(臨床心理士)や関係機関との連携が重要であることが判明した。

Keywords: 少年犯罪, 舞台としての『学校』, 教師の実践的指導力

1. はじめに

最近5年間ほどにおける少年犯罪・非行の研究は、「少年犯罪の凶悪化、低年齢化」と称せられてマスコミで大々的に報道された数々の事件を抜きにしては述べる事ができない。すなわち、「何故、凶悪事件が低年齢化したのか?」「低年齢の凶悪事件が増加しているのか?」「事件を起こす少年の心理はどうなっているのか?精神鑑定の結果は?」等と、インターネットの影響に関するものが、研究の中心となっている。

だが、これらの少年犯罪の多くが、学校という『舞台』の上で演じられていたり、これらの犯罪少年の多くが、学校教育への悩みや疑念を強く表明している以上、「このような事件の防止にはどのような教育的配慮が必要か?」等と、教育臨床の観点からの研究が一方では重要であると思われる。例えば、神戸小学生殺傷事件の少年は、「透明な存在であるボクを造り出した義務教育と、義務教育を生み出した社会への復讐も忘れてはいない」等と、犯行声明文に書いているし、西鉄高速バス乗っ取り事件では、少年が学校でいじめを受けたことが犯行動機の根底にあるとも言われており、実際、この少年は当初は母校への籠城を想定していたとされている。それ故、これらの事件を分析し、これらの少年が、犯罪に至るまでにどのような教育を受けてきたのか、何が欠けていたのか、規範意識が育たなかった、あるいは、規範意識が弱過ぎたのは何故なのか、等を研究することが必要であると思われる。

そこで、これらの少年事件を振り返り、有識者による当時のコメントを手がかりとしながら考察することにしたが、その前に、1997年以降の主な少年事件を概観すると次のようになる。

- 1997年 5月 神戸で中3少年(14歳)が児童を殺傷。
- 1998年 1月 栃木県の中学校で中1少年(13歳)が女性教師をナイフで殺害。
- 1999年 5月 神奈川県の本社員宅で中2少年(13歳)が母親を包丁で殺害。
- 2000年 4月 名古屋市で少年(15歳)が同級生から約5000万円を恐喝。
- 5月 愛知県豊川市で高3少年(17歳)が主婦を殺害。
- 5月 西鉄高速バスを乗っ取った佐賀県の無職の少年(17歳)が乗客の主婦を殺害。
- 6月 岡山県の高3少年(17歳)が野球部の後輩4人を金属バットで殴打。その後、自宅で母親を殺害し自転車で逃亡。
- 8月 大分県の高1少年(15歳)がサバイバルナイフで隣家6人を殺傷。
- 2001年 4月 改正少年法が施行。
- 2003年 7月 長崎市で中1少年(12歳)が4歳男児を大型電器店で誘拐し、4キロ離れた駐車場ビルの屋上から突き落として殺害。
- 2004年 6月 佐世保市の小6女児(11歳)が同級生女児をカッターナイフで殺害。

そこで、まずは、精神鑑定が実施された不可解な少年事件を中心にして研究内容をながめてみることにしよう。

2. 主な少年事件に関する研究

(1) 神戸小学生殺傷事件

事件の概要について、佐木（1997）は、「神戸市須磨区で小学6年の男児を殺害した犯人は、地元の新聞社へ送った〈犯行声明〉に、『殺しをしている時だけは日頃の憎悪から解放され、安らぎを得ることができる。人の痛みのみがボクの痛みを和らげることができる』『透明な存在であるボクを造り出した義務教育と義務教育を生み出した社会への復讐も忘れてはいけない』と書いている。そうして1ヶ月後に逮捕されたのは、中学3年で14歳の少年で、同年3月中旬に須磨区で発生した〈通り魔事件〉でも、小学4年で10歳の女児を殺害し、小学3年で9歳の女児に重傷を負わせていた。この禍禍しい事件は、日本の凶悪犯罪史上において、犯行者の低年齢化という意味で、エポックメイキングな出来事といえる。殺害後に頭部を切断された男児が、知的障害者であったことから、事件の深刻さを思わないわけにはいかない。遺体の頭部は、犯人の少年が在学する中学校の正門に晒されて、『酒鬼薔薇聖斗』のメッセージを口に銜えさせられ、『汚い野菜共には血の制裁を』と書かれていた」等と説明し、「わたしは予てより、『犯罪は社会の病気』と受け止めている。このような事件がなぜ起きたのか、徹底的に解明することにより、病理と向かい合うしかないのである」等と、提言している。

これに対して、小田（1997）は、『快樂殺人』という観点から生物学的問題を指摘し、「この事件は、被害者の遺体発見当初から快樂殺人であることが明白でさらに現場の状況から判断し、後の犯行声明で裏づけられたところでは犯行はじつにオカルティックな様相を帯びていた」「猫を殺したのは動物性愛の裏返しである。すでにこのとき少年は快感を得て、性的興奮が少年のなかに条件づけられていたかもしれない。被害者となった少年を攻撃したのは小児性愛、それも同性愛的小児性愛と、さらに加虐性愛の傾向がみられる。衝動が幼女に向かった幼児性愛、そして、少年殺害に至っては死体愛、死体加虐愛へと段階を追って変化している。一つ一つの欲動の間に、仕切りがっていない。本来、大脳皮質が働くことによって欲動が仕切られるのだが、大脳皮質がそれをコントロールできずにこういった行動を重ねてしまうのである」と考察し、「90年代を迎えるころから、私たち犯罪学者は、1990年代の社会について次のような予測を立てていた」と補足し、①快樂殺人などの異常な犯罪の増加

②カルトおよびオカルティズムをめぐる犯罪の増加、③社会全体の抑制力が低下することによって起きる犯罪、とりわけ少年犯罪の増加、④社会の情報化、コンピュータ社会の到来に基づいた犯罪の増加、⑤女性の権利の増大・伸長、男女関係の変化、社会の中の女性の役割の変化と、母親らしさの低下に基づく女性犯罪の増加、を推測している。

町澤（1998）は、「精神鑑定の結果によると、〈酒鬼薔薇〉少年は、『行為障害』、それに『性的サディズム』の精神障害が加わったものとされました。この鑑定は妥当なものだ」と述べ、「注意欠陥／多動性障害」を追加している。

一方、福島（1997）は、「行為障害、青年期発症型重症」と診断し、『喪と殺人』という視点から、「普通の時間、『死』というものは日常性の背後に隠されている。『生』と『死』との間は厚い壁によって隔てられていて、その間の交通は絶対ないかのように意識して、人は毎日の生活を送っている。しかし、近親者の死は、否応なしに、その壁には『穴』が開いていることに気づかせる。人は生の世界から死の世界に移行し、もう戻ってこない。この事実は子供にとっても大人にとっても衝撃的な発見であろう」等と考察している。

また、宮台（1997）は、少年が『寄生獣』という漫画を愛読していたことをヒントに、「考えてみれば、酒鬼薔薇聖斗には『バモイドオキ神』がいる。これはやはり酒鬼薔薇を支配しているわけではない。彼は自分の意思で聖なる儀式アングリをやる。あるいは、アングリで神名をもらうために、自分の意思で犯罪行為をする。それは自分の意思ではあるけれど、同時に神に捧げられたものだ」「人間が、弱い存在である人間が、自分に対して、さまざまな攻撃を仕掛けてくる環境、自分の行動をさまざまに妨害し、あるいは、ノイズ（雑音）に満ち満ちた環境から身を守るためには、それはきわめて重要な知恵じゃないかと」「ひるがえってみると、14歳程度の年若い少年が、これほど強力な防衛スーツ、自己防衛ツールを発動したということは、諸情報を総合すると、それは特に母親のコミュニケーションが原因であったように推測できますが、はっきりしたことは言えない」等と考察している。

また、高山（1998）は、祖母の死後に少年が奇怪な友人（『エグリちゃん』という身長30～40センチの小さな女の子で、脳がはみ出し目はつぶれていて醜く空腹をおぼえると自分の腕を食べる）と、奇怪な動物（『ガルボス』といい、凶暴性を操る存在）を想像世界の中でつくりあげていたり、夢の中で『バモイドオキ神』（光の塊のようなもの）を見たことや、少年の作文『まかいの犬王』『お母さんなしで生きてきた犬』『懲役13年』や、少年が精神鑑定などの中で描いた課題画（落雷にまっぶたつに引き裂かれた樹木画と、

殺害を終え首を切り落とした直後の自画像)等を分析し、母親による虐待を大きな要因として指摘し、「彼が淳君を描いた絵は本当に清らかなんです」「頭部を切り落としたあと、彼は血を飲んだ。『僕の血は汚れているので、純粋な子供の血を飲めば清められると思った』と、その理由を語った。あの子は淳君を殺したとき、自分も殺されていると思っていた。イメージとしては無理心中にかぎりなく近い行為ではなかったかと思うことがあります」等と考察している。

なお、村瀬(1999)は、イニシエーションという観点から、「神戸の小学生連続殺傷事件で、彼は4つのことをやりました。1つ目は、自分に名前を付ける。酒鬼薔薇聖斗という名前を付けました。2つ目は、おばあさんの死、あるいは、猫を殺して死に目覚めるといふ行為をしています。3つ目は、猫を殺して性的に興奮するということが伝えられました、そして最後に守護神をつくりました。バモイドオキ神です。これは一見すると、一般には考えられないお話かもしれませんが、実は境界を意識した人間はこういうことをするんです」等と考察している。

なお、イニシエーションに関して岩宮(2000)は、『学校という異界』という観点から、「現代社会ではイニシエーションの制度は消滅していると述べたが、この役割を果たすものを現代の日本で考えてみると、学校が最も近い。子どもたちの間で起こっている昔では考えられないほどの残虐性をもつ常軌を逸したいじめも、歪んだ形で出てきた異界での試練と考えられないだろうか」等と、学校教育のあり方について考察している。

さて、少年のその後の経過については草薙(2004)が、「入院して3年が経った頃、Aはようやく人の感情を汲み取れるようになってきた」「Aの性的嗜好はまるで今までのことが嘘のように変化していった。年頃の男の子が持つ女性への興味が、Aにもみられるようになったのだ」等と報告し、医療少年院での矯正教育の効果について検証している。

(2) 黒磯女教師殺害事件

事件の概要について、玉井正明・玉井康之(2002)は、「事件を起こした少年は、2時限目終了後、気分が悪いと言って同級生3人と保健室に入った。養護教諭は、3時限目のチャイムも鳴り、体温の計測でも異常がなかったので、教室に戻るよう促した。少年ともう一人の同級生は、すぐに教室に戻らず、トイレに寄って雑談したために10分ほど授業に遅れた。そのため教諭から、『トイレにそんなに時間はかからないでしょ』と注意を受けた。授業が終わった後、教諭は少年と友人を教室前の廊下に呼び出し、再度、注意をしたが反抗的な態度を崩さなかった。『先生、なにか

悪いこと言った』と問いかける教諭に、少年は『うるせえな』と言いながら、制服のポケットから刃体10cmのバタフライナイフを取り出し、教諭の首筋に当てた。しかし、教諭がひるむ様子を見せなかったため少年は教諭の左胸を刺した。さらに、うつ伏せに倒れている教諭を蹴り、ナイフの柄を持ち替えてなおも刺した。少年は他の教師が駆けつけて止めに入るまで、動かなくなった教諭を内臓が破裂するほど踏みつけていた。教諭は、胸部など7か所の障害を受け、約1時間後に黒磯市の病院で死亡した。ナイフが肺から心臓に達し、失血死したものである」と説明し、「この少年が授業に遅れたのを女性教諭(当時26歳)が見過ごせば悲劇は起きなかった。しかし、生徒のことを常に心配し、指導に熱心な教諭はこれを見過ごすことはできなかった」と感想を述べた後、少年がキレるに至った理由として、①ストレスの蓄積(膝の病気のために好きなスポーツができなかった)、②少年の性格(感情を適切に制御できない)、③テレビゲームの影響(ナイフで相手を倒す決闘ゲームに熱中していた)④授業に遅刻したことを再度指導されたこと、⑤ナイフを突き出したが教諭がひるまなかったこと、⑥少年に対する家庭での抑圧(少年の家庭では、親によく殴られ、有無を言わせない厳しいしつけが見られた)、を指摘している。

山崎(1998)は、「普通の子がキレなければいけない今の学校に問題がある」と指摘し、『ナイフをちらつかせても同教諭が動じなかったので刺した』という供述を取り上げ、「少年はつまり、このとき自分が振る舞おうとまるで動じないものをそこに見たのだ。そしてそれは学校にいるとき、少年が普段から感じていた恐怖だった。だからかれは護身用にナイフを所持していたのである」「自分がぶ厚い壁にいと簡単に弾き返されたような恐怖を味わった。そのため少年はとっさに、目の壁に穴を開けようと教師を刺したのだ。」「殺さないと自分が崩壊する。そうした危機に直面したときだけ、ひとは他人を殺傷するのだ」等と考察している。

一方、竹内(2000)は、本事件が翌朝の朝日新聞で『『普通の子』キレて犯行』という見出しで報道されたことに対して、少年が、「テストが不安」で6月から7月にかけて数日欠席しており、5回も家庭訪問をした教師から「がんばれ」と言われたことや、3学期には、学校でたびたび「嘔吐」していたことを指摘し「かれのからだは『キレる』という臨界点に達していたといつてよい。もちろん教師を刺殺するとはだれも予測できなかったにしても、学校側はかれがトラブルを抱かえていたことは知っていた。いやそれだけでなく、学校はかれを『普通の子』にしようとしていた」「この少年にとっては、『普通の子』に逆戻りさせられるということは、これまで以上の恐怖と不安の中に追

い込まれることであったのではないか」等と、考察している。そして、このような『権力的・暴力的なもの』に対する『恐れと不安』から子どものからだどころを解放するために、『真正の政治教育』が必要であることを指摘し、学校協議会に子どもたちの政治参加を認めることなどを提言している。

横湯（2002）は、この事件の経過を8つの過程に分解し、「危機はどこに潜んでいたか」「危機をはずすとは」等の観点から分析し、「先生の言葉が母親のそれに何とにしていることか」「少年は、夜は母親と寝ていたというが、一時的、部分的に退行・赤ちゃん返りをしていた」と指摘した上で、「このような心理的状态にある子どもにとって、保健室から教室までの距離は大人や教師が推察する以上に『遠い』のである。しかも、彼はトイレで吐いてもいたと言う」「彼は2回注意され、公衆の面前で廊下に呼び出される。学校における廊下は公道である。おさまりかけた『ぶっ殺してやる』の感情を再び刺激したのではないか」「この『ぶっ殺してやる』の言葉は、一見、悪的な言葉に聞こえるが、無意識的にせよそれを口にするだけで、気持ちのコントロールや昇華に役立つこともあるのだということを知っておきたい。この辺をどのように感知するのか、専門性が問われるところである」「思春期の少年の羞恥心や未熟な自尊心への配慮があったならと残念である。彼の嘔吐が心因性のものであったなら、なおさらである。そのような配慮があれば、トイレの遅れの責めもなかったであろう。日本人にはトイレやお手洗いに對する『恥』の文化がある。先生もかつては女性特有のデリカシーがあったはずである。いつのまにか、少年の心と『恥』の文化に無頓着になってしまったのだろうか、それが痛々しい」「一呼吸の『間』の余裕が、生命を救う『あなた、なにやってるの?』になるのではないか。言葉は色である。誠実色にも祈り色にも理解色にもなる。そのような言葉。そのような響き。そのような色のトータルが、荒立った気持ちや心を和ませ落ち着かせる」と考察している。

（3）豊川主婦刺殺事件

事件の概要について、玉井正明・玉井康之（2002）は、「愛知県豊川市、筒井弘さん方で妻（当時65歳）が血だらけで倒れているのを、帰宅した筒井さんが見つけ110番通報した。妻は金づちで殴打された上、包丁で首などを刺されて死亡した。その直前、少年が家から飛び出てきたのを夫が目撃し、格闘したが首などを切られ軽傷を負った。少年は近くの高校の制服であるブレザーを着ていた。『明るく活発、まじめで成績優秀』と近所でも評判のよい高校生が起こした殺人事件に新たな衝撃が広がった。『成績のよい子』が必ずしも『いい子』とは限らないことを実証した事件

である。殺人容疑で逮捕された高校3年の少年（同17歳）は、主婦を金づちで数十回殴り、苦しむ声が大きいので包丁で四十数か所も刺すという異様な方法で殺害した。『人を殺す経験をしてきたかった』と供述しており、明確な動機の見えない殺人である。被害者宅に侵入したのはまったくの偶然で、『たまたま通りかかった家の玄関が少し空いていたから』で、『若い未来のある人はいけないと思い、表札の名前を見て年寄りだと思った』と話している。最寄りの駅まで逃走した後、公衆トイレで一夜を明かし、翌日、交番に一人で自首した。自首の理由について、『寒くて疲れた』と話し、反省の言葉はなく動揺の様子もみられなかった」と説明し、少年が、1歳半の時に中学教師の父親が離婚し、その後、父方祖父母と4人で暮らしており、祖母を「お母さん」と呼んで育てており、祖父も元教師であった等の家庭状況を報告している。

そして、本事件の動機と背景について、①殺人願望とこだわり傾向（少年はかねてから人の死に関心があり、『不老不死薬』の開発を考えていたが、成功の見込みがなく、殺人を選んだ）、②神戸児童連続殺傷事件との共通性、③自己実現を求めた動機なき殺人（祖父母の呪縛を解くための反抗が外部の老人に向けられた）、④少年の明るい性格は、敵意を抑圧して『いい子』を演じてきたことのあらわれ（反動形成）、⑤挫折感（学力の片寄りのために第1志望の高校に入れず大学入試も同じ轍を踏むことが予想されたことで、強い挫折感にさいなまれていた）、⑥事件の数日前に、高校のテニス部を退部し、心に空白が生じたこと（少年は部活に打ち込むことでパターン化した行動様式を持っていた）、等と考察している。

町澤（2000）は、少年の生い立ちを分析して、『復讐』という視点で事件をとらえ、「父親や祖父に対して、怒りが爆発したのです。では、なぜ殺人という暴力が何のゆかりもない他者に向かい、肝心の父や祖父に向かわなかったのでしょうか？ 父や祖父を殺してしまえば、父や祖父は少年のことで恥や汚名を負うこともなく、苦勞することはありません。死んでしまったら、それで『終わり』です。それでは、少年の心は満足できないのです。父や祖父は、少年が他者を殺すことで、『この家の子がこんな悪いことをした』という『最大の屈辱』を受けることになるのです。事件の背景には、少年の父と祖父への復讐の思いがありました。同様に、いかなる理由があれ自分を見棄ててしまった生母への『復讐』の思いもまた、少年の内部で渦巻いていたに違いありません」等と考察している。

小此木（2000）は、少年が精神鑑定で『純粋殺人』と診断されたことについて、「つまりそれは、殺人をしたいから殺してみたかった。あるいは、人を刺すとどんなふうになるかを知りたかったための殺人だという意味である」と解説し、「人が肉体を持ち、刺せば

血が出たり、痛みにもがき、苦しんだりするというのはごく自然の現実なのだが、そうした現実をいまの日本社会の日常の暮らしの中で実際に体験することはむずかしい。実際には誰もが肉食しているにもかかわらず、にわとりや牛や豚と直接触れ合う暮らしは、なくなってしまう」等と、人工環境の中に引きこもって暮らすわれわれの日常生活を指摘し、「いま、自然を失った人工環境の中で生まれ育った若者たちに、自然と身体の直接の出会いを希求する気持ちがひそかに高まっている。その最も深刻な体験は、『手首切り症候群』だ。『私、手首を切って出血させて、傷の痛みをいつもいつも我慢していると、自分が生きているという実感を持つことができるんです。どこの生活にもそういう実感を持てるような体験がなくて』と言う。彼女の左手首には、命の証しのように、いつもしっかり純白の包帯が巻かれている」「現代社会の少年たちの心の中に突如あらわれる激しい攻撃性、人を殺してみたいといった衝動は、何やら、生き物の肉を食べないと元気を失ってしまう野生動物が、突然、拘禁動物化した人間の心の中にたちあらわれるかのようだ。いまのわれわれは、この動物園の拘禁動物と似たような暮らしをする身の上である。そして、自然との闘いの中で得られる身体的な自然感覚があまりにも希薄になった」等と考察している。

ところで、少年の精神鑑定の結果は、「執着心と共感性の不足を特徴とする高機能広汎性発達障害（アスペルガー症候群）」として報道されたため、発達障害への偏見や差別を危惧した門（2001）は、朝日新聞の『論壇』で、「ここで確認しておきたいことは、アスペルガー症候群の人の大部分が犯罪とは無縁だということである。それは、健常者の大部分が犯罪とは無縁であると同様である。むしろ、アスペルガー症候群の子どもは、学校でいじめの標的にされやすく、加害者よりも被害者になることの方が圧倒的に多い。いじめられて情緒不安定になり、その結果攻撃的になることはありうる。しかし、適切な教育と支援があれば、対人関係やコミュニケーションの面で力をつけていくことができ、充実した生活を送り、高等教育を受け、就職し、友人をつくることもできる。そのためには、家族や教師をはじめ周囲の人たちがアスペルガー症候群について正しく理解することがまず必要となる」と述べると同時に、児童青年精神科医の養成に厚生労働省や文部科学省が力を入れるように提言している。

（4）西鉄高速バス乗っ取り事件

事件の概要について、玉井正明・玉井康之（2002）は、「西鉄高速バス乗っ取り事件はゴールデンウィークの最中（豊川市主婦殺害事件の2日後）に起きた。九州自動車道・太宰府インターチェンジ手前で、刃物

をもった少年（当時17歳）が、乗客と運転手計22人乗りの佐賀発福岡行き〈わかす号〉を乗っ取った。バスは中国自動車道を経て山口圏内で山陽自動車道に入り、少年はこの間に、女性3人を死傷させたほか、乗客3人が脱出する際などに負傷した。少年は事件当日の午前9時ごろ、父親と入院中の病院を出て同9時50分ごろ帰宅し、昼前に弁当を持って自転車で家を出た。バスの発車は、午後0時56分で、凶器の肉切り包丁は乗車前に購入した。全長約40センチメートル刃渡り30センチメートルにおよぶ大型で高価なもの（1万4000円）である。少年はバスを乗っ取った後『言うことを聞かないと殺す』と脅して人質の乗客を後方に移動させた。しかし、眠っていて事態に気付くのが遅れた東京都の女性（同34歳）に『ふてくされていますね』と言いながら首や背中を刺して重傷を負わせた。同2時45分ごろ、女性の乗客がトイレを理由にバスを脱出したことに激高し、佐賀市の女性（同50歳）の首や両手首を数回にわたって刺した。約50分後、中国自動車道小郡インターチェンジ（山口県）付近を走行中、女性の乗客が左側の窓から脱出すると、少年は開いた窓近くの座席にいた塚本達子（同68歳）に近づき『ここに誰かいたろう』と叫び、首などを刺した。中国自動車道下松サービスエリア（山口県）にさしかかった同4時20分ごろスピードを落としたバスの左最後部の窓から男性客が飛び降りたため、少年が再び激高、倒れていた塚本達子さんの首などを何度も刺して殺害した。後の2人はいずれもほかの乗客が脱出したため『見せしめだ』『連帯責任だ』などといって切りつけられた。男性客が途中で解放された後、最後までバスに乗ったのは、一人旅の女兒（同6歳）を含む女性9人と運転手であった」と説明し、少年の生い立ちについて、「高校受験が押した2月18日、同級生に校舎2階の非常階段から『飛んでみろ』と言われてためらっていた。しかし、取り上げられた筆箱を『返してほしかったら飛べ』と催促されて実行した。少年は、着地時に足を滑らし、腰椎損傷という大怪我で2週間ほど入院した。高校の入学試験は病室で受け卒業式にも出席できなかった。入学した私立には、9日間だけの登校で5月末に自主退学し大検で進学を目指していた。高校に行かなくなってから事件を起こすまでの約2年間は、自室に引きこもり昼夜逆転の生活をしていった。よく飼う犬を叩き家庭内暴力がエスカレートしていった。父親には名古屋・大阪などへの日帰りドライブを頻繁に強要した。両親は少年の希望もあり、なにかの弾みになればと思い、パソコンを買い与えた。以後、2月末ごろからは鍵をかけて、自室に閉じこもりメール、インターネットに熱中し、言動等から危険を感じるようになった」等と補足し、事件の動機と背景について、①心に深い傷を負った体験を無意識に繰り返そうとした「反復強迫」、

②インターネットを通じて、反社会性の徴候を増幅させたこと（ネットの通信販売でナイフを購入、同世代の少年が起こした凶悪事件に強い関心をいただいた、他）、③豊川市主婦刺殺事件に触発された、④挫折感（志望校には入学できず中退して部屋に引きこもる）、⑤学校で「いじめ」を受けたことが事件の動機の根底にある（当初は母校への箠城を想定しており、「校舎の1階から各教室で生徒を刺し3階の教室に立てこもって注目を浴びたら、飛び降りて死ぬつもりであった」と話している）、⑥存在感のアピール（「派手なことをして社会に自分をアピールしたかった」）⑦不満のターゲットが学校から親に向けられた（両親によって入院させられた少年は、事件後に『親に裏切られた』と供述している）等と考察している。

町澤（2000）は、「彼らはもはや自分のレゾン・デートル（存在価値）がまったくなくなったと感じた時ブラック・ヒーローへの道を踏み出します。どうせ、『表の世界』では輝かしい人生なんか得られない。ならば、犯罪的な世界、暗い闇の世界で皆があつと驚くような事件を起こし、日本中が注目するブラック・ヒーローになってやろうという傾向が若者たちにあり、実際それが事件として表面化しているのです。彼らが殺人を犯す理由の根っ子に、歪んだ自己愛と自尊心が横たわっていることを見ごしにすることはできません」
「彼ら孤立した犯罪予備軍の人たちは、人間を『モノ化』して見ます。それは動物虐待、動物殺しにつながっていきます。多くの少年犯罪の殺害者たちは、人を殺す前に、先行してペットを殺しています。酒鬼薔薇聖斗、京都小学生殺害事件の『てるくはのる』の青年、大分の一家虐殺の少年も、ペット殺しが先行しています」等と考察し、『ブラック・ヒーロー』が伝染していく根拠として、「No.5. 京都で大根が切られ、沼津で淫売女が切られそして!! 豊川で老いばれ女郎が切られ殺されたとか。すばらしい!! しかも僕と同一歳の17歳とか…? よい風潮だ。40ヶ所も女郎を刺した時の快感どうだった!? 真面目に生きるよりはるかにいいだろう!? 僕も今日実行する。これはわが計画をぶち壊した復讐だ!! 20, 21ぐらいの女がいい、強姦した後、首しめて殺す、理想だ!! 2つの快感を味わえる」等の同少年の日記や、『キャットキラー』や『ネオむぎ茶』と名乗っての発信内容や、「福岡に『こどもの王国』を作り、自分はその王様になる」という妄言、等を分析している。

月崎（2001）は、両親の手記を分析し、「親が少年を心配し、先回りをし、何かを決めてしまう様子が感じられる」等と、親の過干渉を問題にしている。

藤井（2000）は、少年の家が、『次郎物語』を書いた下村湖人がしばらく暮らした家から徒歩3分のところにあり、元は古くからの料亭であり、加害者宅の周辺住民が、家から少年の妹の悲鳴がするのを聞いたり

少年が飼っている犬を蹴り上げたりしている姿を目撃していたこと等を報告し、学校で起こったいじめを非難する母親と学校側の言い分の食い違いについて考察している。

小此木（2000）は、「実は、この少年たちの主観的な思い込みの背景には、多くの場合、『インターネットへの引きこもり』がある。バスジャックの少年は、インターネットのチャット（おしゃべり）の中での喧嘩や争いによって発揮していた破壊性を、現実の世界の中で発揮してしまった。この現実と仮装現実の境界の破綻が、あの事件の心理的なメカニズムである」等と考察し、インターネットの魅力として、①匿名で別人格になれる、②「全知全能な自分」を感じられる、③自分の気持ちを純粹に相手に伝えられる、④特定のひとと、親密な一体感がもてる、⑤イヤになったら、いつでもやめられる、等をあげ、この魅力のために、インターネット依存症—インターネット狂—になる危険を指摘し、「遊び」が「狂」に変わるプロセスを分析している。

（5）岡山県金属バット殴打・母親殺人事件

事件の概要について、玉井正明・玉井康之（2002）は、「バット殴打事件の契機になったのは丸刈りをめぐるトラブルである。夏の甲子園大会を間近にした6月中旬、練習試合で3年の主力チームが大敗し『3年は丸刈りにして気合をいれよう』との声があがった。事件を起こした3年生は後輩の2年生から『先輩はしないのか』と迫られ『いやだ』とやりかえしていた。事件の直前に2年生部員から殴打され、からかいを受けたこの少年は悔しさを懸命に耐えようとしていた。その後、2年生の部員が1年生部員に丸刈りを迫っているところを見て突然、金属バットで凶行に及んだ。2年生3人と1年生1人が殴られ、そのうちの1人は頭蓋骨骨折の重傷、他の3人は背中や腕に軽いけがを負った。自宅に戻った少年は、このことで母親に迷惑がかかることを恐れ、自宅の居間で横になってテレビを見ていた母親（同42歳）の頭部を無言のまま金属バットで十数回殴って殺害し、血染めユニホームを着替えて自転車で逃走した。逃避行は、ゲームがぎっしり詰まったリュックを自転車に積み、修学旅行で行ったことのある北海道最北端の宗谷岬を目指していた」と説明し、事件の動機と背景について、『仕返し』という観点から、「事件は仕返しとして起こった。少年は後輩から受けてきたとされる『からかい』について『自分の存在を否定されるようなことをされてきた』と供述している。以前から後輩にボールの投げ方や走塁を茶化され、プロレスや柔道の技をかけられた。少年がランニング中に後輩部員が前に立ち塞がり、足を払い抑え込んだ。彼は文句一つ言わず、もがいて抜け

出すだけであった。女子生徒らの前でズボンをずり降ろされたこともある」等と分析している。だが、一方で、犯行の約1か月前に少年が書いた短い小説『闇の狩人』（主人公が、寝ている3人の少年に金属の棒を3回振り下ろし殺害するというストーリー）や創作文（「僕は、今、もう一人の僕に犯されている。本当の僕を取り返さなければならない」と書き、狩る対象として、母親の名といじめていた2年生部員を挙げている）、そして、逃走中の日記（母親を呼び捨てにして『狩った』と記していること）を分析し、「母親は感情の起伏が激しく、子どもにうるさく言うタイプで、少年はそんな母親にまったく反抗しなかった。母親は『あの子も習っている』『あなたも人より秀でるなにかを身に付けなさい』と言ってソフトボールクラブに入れたり詩吟やピアノまで習わせたと言われる」等と述べ、母親への憎悪や葛藤が殺害の動機とする見方も提示している。そして最後に、「この事件は学校側が適切な対処をとっていれば、本来起こり得なかった」と結び、学校からの110番通報の遅れ（過失）を指摘している。

町澤（2000）は、「この事件の少年は、1学年下の生徒にいじめを受けていました。学年が1年違うというのは、この年代の少年にとっては大変な違いです。『頭を坊主刈りにしろ！』下級生の言葉について少年はキレてしまいました。下級生は実際には死んでいなかったのですが、少年は殺してしまったと思い込んでしまいました。『殺人』という事実を母親が知ったらどれほど嘆き悲しむか、その姿を見たくない。少年は母親がそれを知る前に殺そうと考えたのです。自分の惨めな姿を母親に見せてはかわいそうだという、思春期特有の心理状態でおきた『母親思い』の殺人だったのです。そういう意味では、神戸連続児童殺傷事件の酒鬼薔薇聖斗以来、凶悪事件で決まって少年たちが口にする言葉、『殺してみたかった』というのとは少し違っています。ただ、死を軽く考えているという点では、同じように深刻な問題を孕んでいます。生と死の境界が曖昧で、彼らの中では生も死も漠然としたイメージしか喚起しない抽象的世界なのです」等と考察している。

姜（2000）は、日本社会が過剰同調社会であるという観点から、「過剰同調の果てに『私』という自己が発揮し、もうこれ以上同調の内圧に耐えられなくなったとき、真の意味での他者との対話を欠いている自己は、妄想上のグロテスクなもうひとりの自己を発見し反転して凶行へと『切れて』しまったのではないか」等と考察している。

（6）大分県一家6人殺傷事件

事件の概要について、玉井正明・玉井康之（2002）

は、「大分県野津町で発生した高校1年生（当時15歳）による一家6人殺傷事件は、少年凶悪事件もとうとう農村にまで来たかと思わせる凄まじいものであった。事件が起きたのは、静かな田園地帯の小さな25世帯集落で、お互いが家族ぐるみでつきあいをし、助け合う地縁社会である。特に少年宅と被害者宅は日常釣りや散歩などもともにする昵懇の間であった。見ず知らずの人の殺傷事件と違って、その衝撃はことのほか大きい。少年は、岩崎萬正さん（同65歳）宅の倉庫に隠れて家族全員が寝入るのを待った。自分の時計で家人が寝静まったと思われる午前2時を確認し、母屋裏のふろ場の窓ガラスを金づちで割って侵入した。『弱いものから殺そう』と考え、最初に、離れ2階の子ども部屋に直行し、刃渡り11.3センチメートルのサバイバルナイフで、中学2年の孫（同13歳）を刺殺した。少年とこの孫とは、中学時代のバスケット部の後輩で、日ごろは、野球やテレビゲームで遊び、仲のいい友達であった。そのため、被害者宅の家の間取りや寝室の位置を熟知していた。その後、物音に気付いて起きてきて家族を次々に刺し、岩崎さんの妻（同66歳）、会社員の長女（同41歳）は、胸や背中などをめった刺しにされ3人が死亡、ほぼ即死状態であった。岩崎さんは重体、小学5年男（同11歳）、高校2年女（同16歳）は重傷であった」と説明し、本事件の動機と背景について、①自分に都合の悪い情報の発生源を断とうとしたこと（証拠隠滅）、②異性が身に付けていた物に性欲を感じるフェティシズムの徴候、③全国各地で多発している少年凶悪犯罪の影響（少年は新聞配達をしていた）、④ホラー（恐怖）ビデオの影響と動物虐待、⑤家庭において十分な愛情を受けていなかったこと、⑥対人関係の貧しさ」等と考察し、少年の精神鑑定の結果について、「重度の小児期発症型行為障害」と説明している。なお③に関連する事として、少年は「我が名はBLACK CAT。字を見ろ」と指示し、「ヘンタイ」「スケベ」などの言葉を使って、殺害した中2男子を中傷していたこと等が報道されている。

町澤（2000）は、「この事件は、少年が風呂場をのぞいたことを注意され、被害者一家に恨みを持ったとされています。以前にもものぞき見があり、被害者の家族から無視され、誰も少年に挨拶してくれなかったという経緯もありました。一番仲のよかった年下の男の子ですら挨拶してくれなくなったため、彼は強い恨みを持ちました。彼は実際にのぞきをやっていたからこそ、一層傷ついていたようです。この事件の少年も人間関係を築く能力が低く、年下の子としか遊ぶことができませんでした。そして、さらに重要なのは、この15歳の少年が、被害者一家の2歳年上の女の子に恋愛感情を持っていたことです。彼はその気持ちを打ち明けましたがつれなく拒否されてしまいます。彼はも

とも職業学校志望でしたが、あえて彼女のいる普通科の高校を選んでいるのです。勉強に身が入らなくなり、ピアスや髪の毛を染めることによって非行化への傾向を強めていきました。また先輩に生意気だと暴力を受けています。そしてこの学校をやめようとする相談していました。このように、高校2年生の女の子にフラれ、まっとうに高校生活が送れないほどに落ち込み、それがやがて風呂場ののぞき見という形になりました。そして、被害者の親から彼の親にそのことが伝えられ、叱られることによって怒りが我慢できないものに変わっていったと思われます」等と考察している。

なお、中日新聞の社説（2000）では、少年が被害者の一人である66歳の女性には特になつき、「おばあちゃん」と言っていたこと、そして、少年がピアスを着けたことに「おばあちゃん」が厳しく注意し、少年が反発したエピソードを取り上げ、「学校や家庭、地域社会など大人の支配領域の習慣や生活環境が、子どもの発達との整合性を失っているのではないか」等と指摘している。

3. 少年犯罪から見えてくる研究課題

さて、枚数の制限のため、主な少年事件の紹介は終わり、長崎男児殺害事件（福島章ほか、1997）や佐世保小6同級生殺害事件、そして、5000万円恐喝事件などは次の機会にまわすこととし、次に、これらの事件について教育臨床の観点からまず課題を整理してみることにしたい。

まず、これまでのところで紹介した識者の見解を参考にして、主な少年事件について事例研究し、社会、家庭（親子関係、夫婦関係など）、学校、司法、等のあり方について研究を重ねることが重要であるが、特に、以下の点について検討を深め、非行少年への効果的ななかかわりの研究と社会的なネットワークづくりの実践が必要であると思われる。

- ① 少年を犯罪に走らせないためのネットワークをつくること。子育て支援からはじまり、学校内での指導のあり方、児童相談所や警察など関係機関との連携のあり方等を探り、早期発見による早期ケアのネットワークを確立すること。
- ② 最近の少年犯罪と関連の深いインターネットなどに関して、モラルなどを習得させるプログラムの開発をすること。（なお、この問題は、今回はふれることができなかったが、出会い系サイトなどの援助交際にかかわる少年事件とも関連している）
- ③ 思春期の少年犯罪と関連の深い性の問題に関して、効果的な性教育のあり方や性に関して悩みを持つ少年へのケアのあり方について研究すること。
- ④ 非行少年に対する矯正教育のあり方について研究し

その成果を教員研修に生かして、教師がこれらの少年をケア出来る実践力を高めると同時に、問題徴候を早期に発見できる力量を高めること。

4. 「怨み」を聞く回路づくりの重要性

さて、少年たちに犯罪をおこさせないために、教師に求められる実践力を要約すると、①いじめを早期に見抜き、適切な対応が出来る力、②思春期の少年の羞恥心や未熟な自尊心に配慮した声かけ（言葉かけ）ができる力、③少年がテストや試合などで挫折した時に歪んだ自己愛や自尊心におちいらないように適切にケアができる力、④危険を予兆している「日記」「作文」「絵」や動物虐待などに素早く気づく力、⑤過剰同調社会から生み出される「校則」等を吟味し、「真正の政治教育」を実践できる力、等があげられる。

それ故、教師は、これらの実践力を身につけるために、研修を受けたり、日頃の実践に対してスーパービジョンを受けたりして、実践力をつけていくことが必要であると思われるが、その中でも、もっとも力をつけなければならないのは、「怨み」を聞きとれる力である。

この点について、河合（2003）は、これらの少年犯罪に関してまず考えるべき事として、「現在社会に対する怨みと攻撃性の強さ、そして、歪曲性」を指摘し「その怨みや復讐の念は、ある特定の個人に向けられたものではなく、社会全般に対するものである」「何も努力しないで『有名』になる安易な方法は、悪いことをして新聞に載ることである。マスコミが騒ぐほどその人は喜ぶわけである」「犯罪はその社会の影の部分であり、それによって、影の側から見た社会の姿を露呈する働きを持っている」等と分析し、「このような恐ろしい犯罪を生み出した社会に生きるわれわれは不運や不幸が重なり合った人の声が、正当な道筋を通して一般の人に達するような機構をちゃんと持っているかについて反省する必要がある。競争競争で、ただ強い者が勝つというだけの社会は、まったく思いがけない歪んだ形で反作用を受けてしまう」と考察している。それ故、教師は、「学校」という社会の中において、「怨み」を聞く回路づくりを日頃の教育実践の中においても心がけることが大切であると思われる。また、「怨み」を聞く回路づくりの訓練を受けてきているスクールカウンセラー（臨床心理士）と積極的に連携をとって、心に深い傷をもって非行や犯罪へと駆り立てられてしまう児童・生徒への教育にあたることが望まれる。

5. 『舞台』としての学校のあり方

さて、最後に、少年犯罪の不可解な『舞台』として

学校が選ばれるのではなくて、学校がこれらの少年たちにとって楽しい『舞台』として存在するために、教師は何を心がければよいかについて考えてみたい。

山口(1988)は、「遊びのいちばん大切なところは遊んでいるうちに人間はふと気がおかしくなって、今まで考えなかったことをすることです。それは新しい可能性があるということです」と指摘し、「私が中学校の先生をやっているときから今まで、『大学の先生に比べて中学校の先生は、程度の低い子供を相手にしている』という見方がどうも一般的です。ところが、事情はずいぶんちがってきているのではないのでしょうか。むしろ今日、子供と接する時間の多い人間は、可能性をよけい持つことになる。『森林浴』といった言葉のように『子供浴』みたいなことを経験しているところがある。だから、子供と接している時間の多い人は、人間の新しい可能性を探る先兵になる」と問題提起し、「私は、そういう子供を包み込む空間である学校は、劇場であるべきだと思っています。しかし、今の学校は劇場とはとうていいえません。私のいう意味は、人と人とのぶつかり合い、異質の物のぶつかり合いのあるところを劇場と呼びます」「芭蕉にならなければ、これまでの学校は『不易』の部分が強調され過ぎていた。『流行』の部分をいかに取り入れるか、『逸脱』をどう取り込んでいくかが、これからの学校の非常に大きな問題でもある」「子供にいろいろなことを伝える一方、逆に子供から何かを吸収することによって、新しいタイプの人間になっていく可能性が十分に考えられる」等と考察している。

一方、河合(2003)は、『いじめ根絶論』を省み、「いじめをなくする一番よい方法は、『いじめ』のことにせっかちに対処するのではなく、こどもたちに伸び伸びとした楽しい生活を準備することである。なんとかしていじめをなくそうとか、見つけだそうと頑張るのではなく、子どもたちがリラックスできる状態をつくりだしていく、親や教育者の温かい姿勢が大切なのである」「子どもたちが『やり切れない』、『むかつく』状況をつくっておき、まるで、いじめをせざるを得ないような状況に追い込んでおきながら、いくら『いじめの根絶』を叫んでも無理というものである」「いじめを無くすることは大切なことである。しかしそれを無くそうと肩に力を入れるのではなく、むしろ肩の力を抜いて、『いったい自分は、こどもたちが自由に楽しく生きていくために、どれほどのことをしているだろう』とか、『子どもたちと一緒に楽しい時間をどれほど過ごしているだろう』とかいうようなことを、それぞれの大人が考え直してみる必要があるのではなからうか」等と述べている。

これらの考えを考慮しながら、教師たちが日々の教育を実践されることを期待したい。

【文献】

- 中日新聞(2000)：社説－15歳の心と地域社会。中日新聞8月16日朝刊。
- 藤井誠二(2000)：17歳の殺人者。ワニブックス。
- 福島章(1997)：殺人者のカルテ。清流出版。
- 福島章他(2003)：長崎男児殺害事件から考える－子どもの「犯罪」をどう防ぐか－金子書房。児童心理別冊,57(17)
- 廣井亮一(2004)：司法臨床入門－家裁調査官のアプローチ。日本評論社。
- 岩宮恵子(2000)：思春期のイニシエーション。河合隼雄(編)心理療法。岩波書店,105-150。
- 門真一郎(2001)：アスペルガー症候群に理解を。朝日新聞1月19日朝刊。
- 姜尚中(2000)：「心の闇」より社会の病理追求を朝日新聞7月28日。
- 河合隼雄(2003)：縦糸横糸。新潮社,63-66。(「怨み」を聞く回路－神戸・小学生殺害事件の周辺)
- 草薙厚子(2004)：少年A 矯正2500日 全記録。文藝春秋。
- 町澤静夫(1998)：自己中心性の病理。双葉社。
- 町澤静夫(2000)：佐賀バスジャック事件の警告－孤立する家族。壊れた17歳。マガジンハウス。
- 宮台真司(1997)：透明な存在の不透明な悪意。春秋社。
- 村瀬学(1999)：記念講演『心とところをつなぐ』－石に花咲かす。ほんの森出版。
- 小田晋(1997)：神戸小学生殺害事件の心理分析。光文社。
- 小此木啓吾(2000)：「ケータイ・ネット人間」の精神分析。飛鳥新社。
- 佐木隆三(1997)：犯罪は社会の病気。岩波書店編集部(編)教育をどうする。岩波書店,252-253。
- 高山文彦(1998)：「少年A」14歳の肖像。新潮社。
- 竹内常一(2000)：教育を変える－暴力を越えて平和の地平へ。桜井書店。
- 玉井正明・玉井康之(2002)：少年の凶悪犯罪・問題行動はなぜ起きるのか。ぎょうせい。
- 月崎映央(2001)：「少女監禁」と「バスジャック」－マスコミ報道と精神医療。宝島社新書。
- 山口昌男(1988)：学校という舞台－いじめ・挫折からの脱出。講談社。
- 山崎哲(1998)：「少年」事件ブック－居場所のない子どもたち。春秋社。
- 横湯園子(2002)：教育臨床心理学－愛・いやし・人権そして回復。東京大学出版会。